

未来の教育を支える 優れた教員の育成を目指す 養成・研修の一体的改革推進

—教員養成大学と教育委員会の協働による
特色ある人材育成システムの構築—



Contents

2	Contents
3	4年次の研究
4-7	I 教員の養成と研修に関するアンケート調査
	1 調査の概要
	2 教育・指導上の資質能力が身に付いているかどうかの現状認識と課題
	3 教員養成期に身につけておくべき資質能力
8-9	II 課外ゼミナール「Pすく〜る」の実践
	1 教師力育成「探究の対話 (p4c) ゼミナール Pすく〜る」とは
	2 全国防災ジュニアリーダー育成オンライン研修ファシリテーター実践
10-11	III 現職教員対象の本学の取組
	1 教職大学院防災合同研修 (仙台市教育委員会との連携事業)
12-15	IV 教育委員会の取組
	1 学生が参加可能な教員研修
	2 OJT サポート事業
	3 発展期研修の実践
16-17	V 学校現場のOJT
	1 校内留学
18-19	VI 4年次研究の成果と課題

表紙の写真 上段左・中：発展期研修 右：校内留学 下段：課外ゼミナール「Pすく〜る」(令和2年2月)

4年次の研究

本事業は、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い高め合う教員の育成コミュニティの構築に向けて～」(中教審第184号)の提言を踏まえ、未来を支える質の高い人材育成の推進を目指して実施しているもので、今年度で4年目となる。

これまでの研究では、2つの調査(※1、2)から明らかになった結果をもとに、養成段階の学生および現職教員への有効な研修を提案、また企画・実践をしてきた。

- ※1 仙台市教育センターが実施している初任者研修、5年経験者研修、10年経験者研修の受講者(仙台市立学校在籍教員)と本学学部4年生を対象とした「教員の養成と研修に関するアンケート調査」(2017年、2018年、2019年)
- ※2 学校現場の実態を把握するために学校長と若手教員を対象に行った「聞き取り調査」(同)

今年度は、これまでの積み重ねを受けて、主として2つの実践とその調査・分析・検証を行うことを予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により以下のように調整し、実践した。

一つ目は、養成段階の取組として立ち上げた本学課外ゼミナール「Pすく〜る」を「Miyakyo Styleの主体的・対話的で深い学びのコミュニティづくり」と位置づけ、教育課程内の学びでは身につけにくい「子ども理解の力」を、主体的・体験的な学びの活動を通して身につける実践的研究を行う。

⇒課外活動の制限・自粛要請により、オンラインでの活動が主となった。また、「教員の養成と研修に関するアンケート調査」から明確になった防災への意識の高さを「Miyakyo Style」の学びにつなげる実践を行った。

二つ目は、仙台市が学校管理職および教員に求める資質能力をもとに、教員一人一人が研修を有効に活用し、資質向上につなげる意識を高める手立てを探ること。具体的には、仙台市教育センターが導入したオンライン研修申込システムに付加されている個人の研修履歴(研修記録)を有効に活用することで、個々の教員のキャリアアップへの意識を高めることを目指す。

また、教員の資質能力の向上に直結するOJTの具体的な実践の聞き取りを積み重ねていく。その際、働き方改革を意識し、多忙な教育現場で実現可能な研修のあり方について研究を深めていく。

⇒臨時休業措置後の学びの保障のため、教育センターに出向いての研修受講が減少傾向となり、OJTの重要性が増した。そのため、仙台市教育委員会(教育センター)の、若手教員育成を学校現場で担う視点を含む中堅教員悉皆研修受講状況を調査、OJTサポート事業の実践を検討した。また、学校現場でのOJTの工夫と成果を聞き取った。

新型コロナウイルス感染症のみならず、新たな危機も予測される中、コロナ以前に戻ることは現実的ではない。令和3年1月の中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」では、新たな学校の役割が示されている。期せずして、オンライン研修と対面研修の今後のあり方について探ることとなった今年度の研究であったが、答申に示された内容と合致するものとなり、今後に向けた新たな一歩となった。

I 教員の養成と研修に関するアンケート調査

1 調査の概要

	学部4年生	初任研	5年研	10年研	計
2017	319	124	141	56	640
2018	279	183	108	188	758
2019	260	274	110	118	762

対象

本事業の協働研究機関である仙台市教育センターが実施している、初任者研修、5年経験者研修、10年経験者研修の受講者（仙台市立学校在籍教員に特化）および宮城教育大学学部4年生

調査の項立てと質問項目

教育・指導上の資質能力が身についているかどうかの状況（本人の現状認識）

教員養成期（教員養成大学卒業まで）に身につけておくべき資質能力

の2項立てで、それぞれ「教科指導」「生徒指導・教育相談」「学級づくり・学校づくり」「そのほかの教員業務にかかわる資質等」「教員として、そして社会人としての基礎的素養」について各6～7項目、合計32の質問項目を『5件法』で回答

明らかになることが期待される結果

- ①採用前と各教職経験段階での「資質能力についての本人の現状認識」の実態と課題
- ②学生から10年経験者までの経験年数による資質能力獲得の変化
- ③学生、現職教員それぞれが考える教員養成期で身につけておくべき資質能力
- ④養成段階から、育成期・向上期（市教委設定キャリアステージによる）までの研修の在り方の指標

2 教育・指導上の資質能力が身についているかどうかの現状認識と課題

2017、2018年度のアンケート調査で課題と捉えたのは、どのステージにおいても現状認識が低い項目である。どのステージにおいても現状認識が低い項目とは、①道徳を指導する力、②特別支援活動教育の最新知識と指導・支援する力、③不登校・学校不適応状態の幼児児童生徒を指導・支援する力、④地域教材を開発し、活用する力、であった。

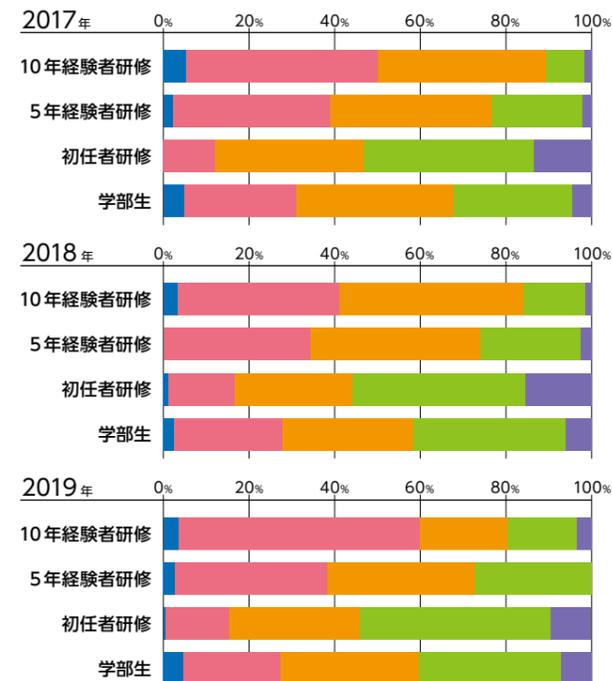
※【教育・指導上の資質能力が身についているかどうかの状況】の項目で、10年研までに「かなり身につけている＋少し身につけている」が50%に満たない項目

道徳の教科化への対応は学校現場でも急務として取り組んでいるが結果につながるには至っていない。特別支援や生徒指導項目は、学校現場が抱えるいじめ・不登校問題とも関連する結果である。また、地域協働でのチーム学校を掲げるこれからの学校において、地域と連携する力は必須である。こうした理由から、養成段階・現職双方の課題として、養成および研修計画に反映する必要があると提言したい。

これらの項目を、2019年度調査を加え、3年間の調査を比較してみた結果が次ページである。どの項目も現状認識の高まりが見られる。3年間のみの調査であり早計な判断はできないが、課題認識が進んでいる傾向は捉えることができる。

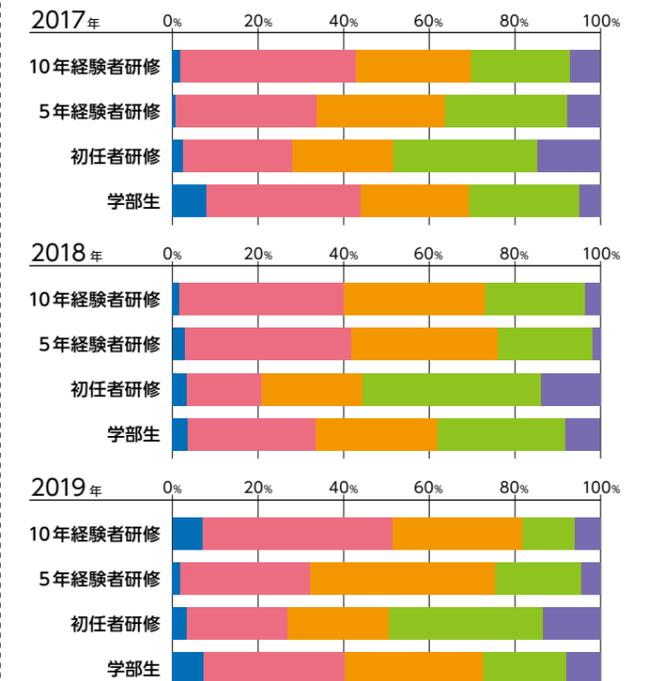
●道徳を指導する力

■かなり身につけている ■少し身につけている ■どちらともいえない
■あまり身につけていない ■ほとんど身につけていない



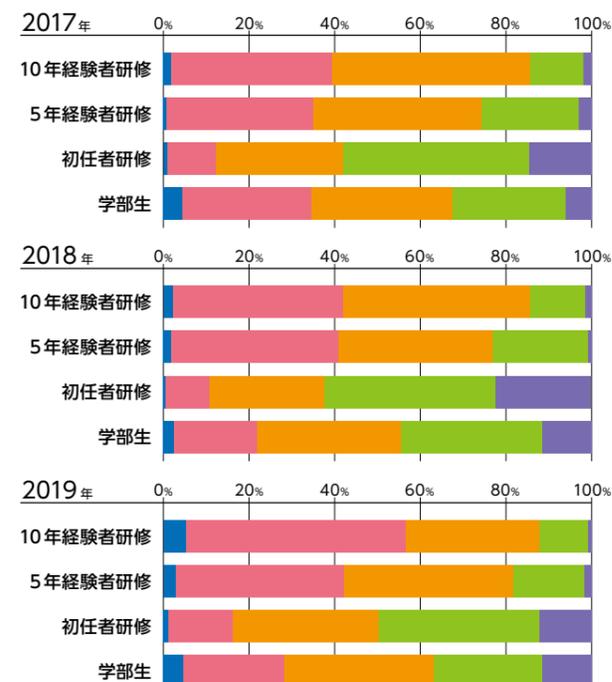
●特別支援活動教育の最新知識と指導・支援する力

■かなり身につけている ■少し身につけている ■どちらともいえない
■あまり身につけていない ■ほとんど身につけていない



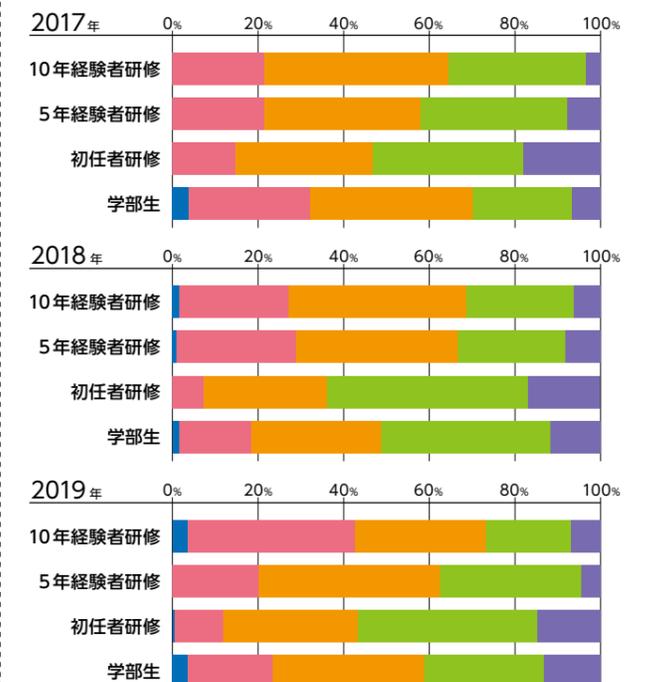
●不登校・学校不適応状態の幼児児童生徒を指導・支援する力

■かなり身につけている ■少し身につけている ■どちらともいえない
■あまり身につけていない ■ほとんど身につけていない



●地域教材を開発し、活用する力

■かなり身につけている ■少し身につけている ■どちらともいえない
■あまり身につけていない ■ほとんど身につけていない



3 教員養成期に身につけておくべき資質能力

2017、2018年度のアンケート調査では、この調査によって明らかになることが期待される結果のうち、

- ①採用前と各教職経験段階での「資質能力についての本人の現状認識」の実態と課題
- ②学生から10年経験者までの経験年数による資質能力獲得の変化

の2項目を、主として考察してきた。

2019年度のアンケート調査では、大量採用(2019年度調査 初任研274は、2018年度比1.5倍、2017年度比2.2倍)により、初任者であっても4月から担任ができる力量を付けて欲しいという現場の声があることから、

- ③学生、現職教員それぞれが考える教員養成期で身につけておくべき資質能力

に焦点をあてた。

■教員の養成と研修に関するアンケート調査分析(学生)

調査の項立て 養成期(大学卒業まで)に身につけておくべき資質能力
 明らかになることが期待される結果 学生が考える教員養成期で身につけておくべき資質能力

質問項目		学生(260)
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5e 社会性や常識	243
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5a 教育者としての使命感や責任感	241
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5c 対人関係能力	241
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5d チーム力、協調性	241
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5b 子どもに対する教育的愛情	239
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5g 豊かな人間性	239
1. 教科指導	1c 教材を解釈し、指導計画を作成する力	237
1. 教科指導	1a 教科に関する専門知識	235
2. 生徒指導・教育指導等	2a 子どもの成長・発達についての専門知識	235
2. 生徒指導・教育指導等	2b 幼児児童生徒を理解する力	235
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5f 幅広い教養、経験	235
2. 生徒指導・教育指導等	2f いわゆる発達障害と考えられる幼児児童生徒を指導・支援する力	234
1. 教科指導	1b 教科の授業展開・指導方法に関する専門知識	233
2. 生徒指導・教育指導等	2e 特別支援教育の最新知識と指導・支援する力	233
1. 教科指導	1f 授業を振り返り、再構成していく力	230
2. 生徒指導・教育指導等	2g 不登校・学校不適応状態の幼児児童生徒を指導・支援する力	230
4. そのほかの教員業務にかかわる資質等	4f 教師として生涯にわたって学び続けようとする姿勢	230
1. 教科指導	1d 授業を展開していく力	227
4. そのほかの教員業務にかかわる資質等	4c 防災教育・安全教育に関する知識・技能	225
3. 学級づくり・学校づくり	3a 教育の制度および経営に関する専門知識	224
3. 学級づくり・学校づくり	3b 学級集団を把握・理解する力	223
2. 生徒指導・教育指導等	2c 道徳を指導する力	222
4. そのほかの教員業務にかかわる資質等	4d 授業においてICTを活用する力	222
2. 生徒指導・教育指導等	2d 特別活動を指導する力	217
3. 学級づくり・学校づくり	3c 学級づくりの力	216
1. 教科指導	1e 学習成果について評価する力	213
4. そのほかの教員業務にかかわる資質等	4e 地域教材を開発し、活用する力	207
3. 学級づくり・学校づくり	3e 保護者からの要望に対応する力	197
3. 学級づくり・学校づくり	3d 学年行事・学校行事を企画・運営する力	181
4. そのほかの教員業務にかかわる資質等	4b 課外活動を指導する力	179
4. そのほかの教員業務にかかわる資質等	4a 校務における文書作成等の技能	175
3. 学級づくり・学校づくり	3f 地域と連携・協働する力	166

このアンケート調査では、現場で10年の経験を積んだ現職教員の実感が明らかになることを期待し、学生との意識の違いを見ようとしていた。この結果を当然とみるべきかどうかだが、学生、10年経験者の考える「教員養成期で身につけておくべき資質能力」は見事に一致している。実は管理職ヒアリングでも、ほぼ同様の結果が得られている。(2017年度学校長ヒアリング)

■教員養成段階(大学在学中)で身に付け(させ)て欲しい資質能力(2017年度学校長ヒアリングから)

- コミュニケーション力
- 社会人常識(ビジネスマナー)
- イレギュラーへの対応力
- 特別支援(発達障がい対応力) スキルトレーニング
- 分からないことを教えてと言える素直さ、意見を受入れる力
- どう頑張ってもできない子どもの痛みが分かる教員を育てて欲しい
- 4月から担任できる力を付けて欲しい
- 指導技術の基になる教育哲学
- 教科指導技術

■教員の養成と研修に関するアンケート調査分析(現職教員10年経験者)

調査の項立て 養成期(大学卒業まで)に身につけておくべき資質能力
 明らかになることが期待される結果 現職教員(10年経験者)が考える教員養成期で身につけておくべき資質能力

質問項目		10年(118)
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5c 対人関係能力	117
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5d チーム力、協調性	116
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5e 社会性や常識	114
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5b 子どもに対する教育的愛情	110
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5g 豊かな人間性	109
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5a 教育者としての使命感や責任感	105
5. 教員として、そして社会人としての基礎的素養	5f 幅広い教養、経験	103
4. そのほかの教員業務にかかわる資質等	4c 防災教育・安全教育に関する知識・技能	101
2. 生徒指導・教育指導等	2a 子どもの成長・発達についての専門知識	100
4. そのほかの教員業務にかかわる資質等	4a 校務における文書作成等の技能	98
3. 学級づくり・学校づくり	3b 学級集団を把握・理解する力	96
1. 教科指導	1a 教科に関する専門知識	95
2. 生徒指導・教育指導等	2b 幼児児童生徒を理解する力	94
2. 生徒指導・教育指導等	2f いわゆる発達障害と考えられる幼児児童生徒を指導・支援する力	94
3. 学級づくり・学校づくり	3c 学級づくりの力	91
2. 生徒指導・教育指導等	2e 特別支援教育の最新知識と指導・支援する力	90
1. 教科指導	1b 教科の授業展開・指導方法に関する専門知識	88
1. 教科指導	1c 教材を解釈し、指導計画を作成する力	85
2. 生徒指導・教育指導等	2g 不登校・学校不適応状態の幼児児童生徒を指導・支援する力	85
2. 生徒指導・教育指導等	2c 道徳を指導する力	84
1. 教科指導	1d 授業を展開していく力	82
1. 教科指導	1f 授業を振り返り、再構成していく力	81
2. 生徒指導・教育指導等	2d 特別活動を指導する力	75
1. 教科指導	1e 学習成果について評価する力	72
3. 学級づくり・学校づくり	3e 保護者からの要望に対応する力	67
4. そのほかの教員業務にかかわる資質等	4d 授業においてICTを活用する力	66
3. 学級づくり・学校づくり	3a 教育の制度および経営に関する専門知識	64
4. そのほかの教員業務にかかわる資質等	4f 教師として生涯にわたって学び続けようとする姿勢	63
3. 学級づくり・学校づくり	3f 地域と連携・協働する力	55
4. そのほかの教員業務にかかわる資質等	4b 課外活動を指導する力	53
4. そのほかの教員業務にかかわる資質等	4e 地域教材を開発し、活用する力	48
3. 学級づくり・学校づくり	3d 学年行事・学校行事を企画・運営する力	44

10年経験者調査で、「教員として、そして社会人としての基礎的素養の項目」の次にあげられていたのが、「防災教育・安全教育に関する知識・技能」だった。東日本大震災の被災地としての意識の高さか、危機管理意識が反映されたのか、2019年調査はコロナ禍前に実施したものであるが、今後の学校教育の中で求められる安全・安心な学びを支える資質能力として、本学の特色として位置づけたい。

II 課外ゼミナール「Pすく〜る」の実践

1 教師力育成「探究の対話(p4c)ゼミナール Pすく〜る」とは

■趣旨

これからの時代の教員に求められる資質能力を身に付けた学生を育成するために、現行の正規授業科目以外に、学生が主体的・意欲的に学べる場を設けることが必要である。課外での学びを通して、教師としての力量を備えた学生を数多く輩出することを目指す。

■目的

- ・教職の魅力を実感させ、教師を志望する学生、院生を増やす
- ・現在、学校現場で重視している教育活動への理解を深めさせ、指導力を身に付けさせる。
(いじめ・不登校対応、防災教育、インクルーシブ教育、情報活用能力育成)
- ・教師として必ず身に付けたい実践力を養う(児童・生徒理解、学級づくり、保護者対応、地域協働)

■内容

- (1) 参加対象者 ・学部、大学院の教職志望の学生(自主参加)
- (2) 開催日 ・通年開催 ・毎週水曜日4限の時間帯 ・特設の時間帯(体験活動、現地視察等)
- (3) 指導者 ・学校現場での教職経験のある特任教員、学内の意欲的な専任教員等
(上廣倫理教育アカデミー、キャリアサポ、311いのちを守る教育研修機構 等)

(4) 活動内容

- ①防災教育探究
 - ・311ゼミ学生との協働
 - ・主体的で対話的な活動として探究の対話を活用
- ②いじめ問題探究
 - ・学級内の支持的風土構築に探究の対話の活用
 - ・現行の「いじめ防止ボランティア活動」
- ③野外活動探究・体験活動探究
 - ・現行の「探究の対話キャンプ」の活用
 - ・野外活動と探究の対話の包括的な活動を通しての学び
- ④インクルーシブ教育探求
 - ・特別支援教育の理解と対応
- ⑤学校現場でのボランティア活動(ボランティア理解、実践、振り返り)



「Pすく〜る」
Philosophy & People
Safety
Communication
Opportunity
Occupation
Laboratory

■今後のスケジュール案

2019年度	ゼミナールキックオフ	開催方針等の立案、スケジュール組み
2020年度	ゼミナール通年開催	実践データの積み上げ・評価・検討
2021年度	ゼミナール通年開催	// 追跡調査、カリキュラム化検討
2022年度	カリキュラム導入	

2 全国防災ジュニアリーダー育成オンライン研修ファシリテーター実践

新型コロナウイルス感染症による課外活動の制限・自粛により、10月がスタートになり、体験活動ができないなど大幅な変更を余儀なくされた。その中で、活動内容①のオンラインによる活動を報告する。

令和2年度全国中学生・高校生防災会議 全国防災ジュニアリーダー育成オンライン研修 グループファシリテーターとしての活動記録から

- ①防災意識の高い中学生、高校生の学校での取組みを聞き、私自身防災意識を高める有意義な会議だった。自身のファシリテートが拙かったことに数々反省…(教職大学院 Pすく〜る参加)
- ②いろいろな地域から参加しているからこそ、各学校の取組みや防災に対する考え方もあって、とても面白かった。私も負けずに、受けた刺激や学びをもとに、できる防災を考え実行していきたい。(311ゼミ生)
- ③教師を目指す身として良い経験だった。中高生の姿に頼もしさを感じた。ファシリテーターとしては状況に応じた対応力を身につけたいと思った。(Pすく〜る参加)
- ④中高生たちが防災にここまで真剣に向き合っていることに驚いた。私自身も、防災を伝えていく世代としての自覚を持つことができた。(夏キャンプ参加)
- ⑤学びを地域に還元している点が素晴らしいと感じ、活動のレベルの高さに驚いた。若い世代が人をやる気にさせるエネルギーを持っている。(Pすく〜る参加)
- ⑥自分自身の成長に着目して話す姿が印象的で、自分たちの活動に活かそうという気持ちを強く感じた。教員を目指す立場として日本内外のことを知っておく重要性が分かった。教員としてできる活動をしていきたい。(Pすく〜る参加)
- ⑦ファシリテーターの重要性や難しさを体感した。自分が中高生の時は見て見ぬふりをしていたかもしれない。全国の防災活動をしている学校とこれからも一緒に活動していきたい。(311ゼミ生、Pすく〜る参加)
- ⑧中高生が防災に向き合っている勢いや輝きに圧倒され、いてもたってもいられないような気持ちになった。防災は明るくて、日常そのものと感じた。私もここから一緒に防災に向き合っていきます。(夏キャンプ参加)
- ⑨生徒や先生方の話を聞いて、自分も教員になりたいという思いが一層強くなり、教員になった際には防災の取組に積極的に関わりたいと思った。(子ども文化コース)
- ⑩コロナ禍でもできることに懸命に取り組んでいる姿に感銘を受けた。防災活動は、実際に被災するまでどこか他人事のような感覚になりがちだが、若いパワーを社会に還元していきたい。(教職大学院)



参加した中高生はもとより、ファシリテーターを務めた学生たちが多くの気づきと学びを得たことが分かる記録となっている。学長の言う「p4cは教員養成教育で大事な研修の場になる。学生が自身の未熟さを納得して改善していくためのp4c。同時に子どもたちの力を育成し、将来に備えるという教育にもっていくためのp4c。その融合が本学の根源的な教育」(令和元11月29日宮教大/上廣倫理アカデミー第3回運営諮問委員会)が表れた取組となった。

III 現職教員対象の本学の取組み

1 教職大学院防災研修(仙台市教育委員会との連携事業)

(防災教育研修機構<311いのちを守る教育研修機構>准教授 小田隆史 記)

■教職大学院の防災教育授業を現職防災主任に公開した合同研修を初実施

宮城教育大学は、仙台市教育委員会と連携して、同市教育センターの防災主任研修受講者を対象に学校防災研修を2回実施した。宮教大教職大学院の防災教育の授業の一部を、現職の防災主任に公開し、大学の高度な専門的知見を現場に活かしてもらうのが狙い。新型コロナ対策のため人数を制限し、合計20名が受講した。



初回は10月27日(火)、同大2号館を会場に、気象庁の大雨ワークショップ「経験したことのない大雨 その時どうする?」をもとにグループで討議した。教職大学院は、平成27年から、仙台管区気象台と共同で教員研修にこのワークショップを活用している。佐藤美知子准教授(仙台市小学校実務家教員)を進行役として、近年巨大化が懸念される台風への備えについて、刻々と変化する状況のなか、正しい判断をするための情報の活かし方、事前の備えなどについて学んだ。参加者からは「話し合いで考えの幅が広がった。今後の学校の防災教育に活かしていきたい」など感想があった。

11月10日(火)には「ICTを用いた身近な地域のハザード・災害リスク理解」と題し、同大の情報活用能力育成機構演習室を会場に、各自コンピュータを操作して地図等を学校防災に有効活用する実践的な手法を学んだ。小田隆史准教授(地理学)が、ウェブ上の「地理院地図」や「地域防災Web」などの無料ツールから具体的にどのような情報を読み取り、学区周辺の自然環境や社会特性を理解し、備えに活かせるのか、防災教育に応用できるかについて解説した。



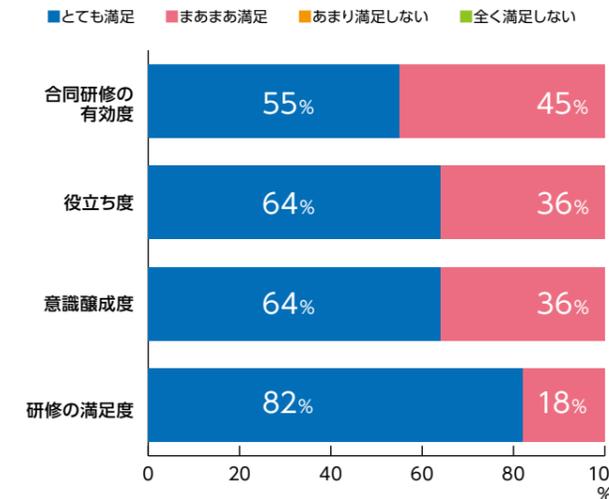
学校防災について学ぶため今年4月に教職大学院に進学した吉川征吾氏(仙台市立東仙台中学校教諭)は、「自分も防災主任経験者。多忙な現場で、防災の専門的知識を独学で身につけるのは難しく、今回のような研修機会は貴重だ」と振り返った。

仙台市教育センターの鈴木文子主任指導主事は「参加した防災主任に主体的に取り組む防災教育の新たな視点を与えられたのではないかと評価した。

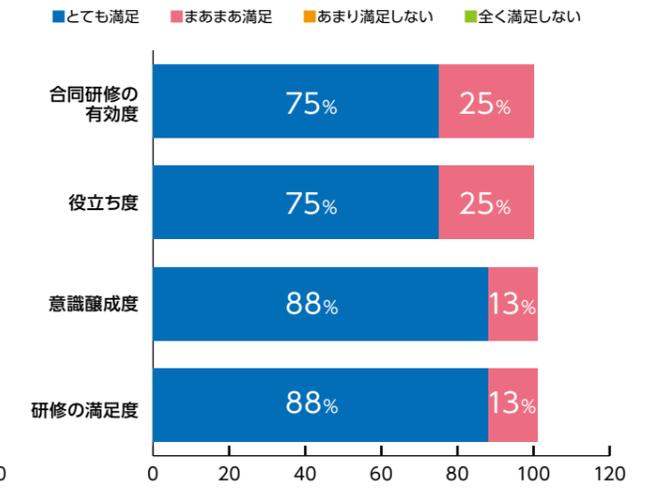
宮城教育大学は2019年4月、防災教育研修機構<311いのちを守る教育研修機構>を発足させ、学生や現職教員に対する防災研修の充実を図っている。関係機関との連携・協働を重視し、防災人材育成の拠点化を目指している。

同年8月には、仙台市・仙台市教育委員会と防災教育・啓発の推進に関する相互連携協定を締結。震災遺構仙台市立荒浜小学校の教育資源としての活用、学部学生の被災地研修の実施、職員間伝承プログラムの開発など、震災から10年を目前に、震災伝承を軸としながら多様な災害に対応できる人材育成に向けて連携を深化させている。

●大雨ワークショップ(10月27日)



●Web教材の利活用(11月10日)



■自由記述感想

- ・ワークショップでの話し合いで様々な意見が出たことで、考えの幅を広げることができた。
- ・中学生向けにでも実践できそうなワークショップで、今後に生かしたいと思った。
- ・来月、学校で大雨ワークショップを実施するにあたり、とても参考になることが数多くあった。
- ・小さな用水路等にも気を付けていきたい。
- ・コロナにより本来の形での実施にならず残念だったが、このような状況の中でも研修の機会をいただきありがとうございました。
- ・今まで知らなかったサイトや活用方法を知ることができとても良い研修だった。また機会があれば受けたい。
- ・防災教育の教材としてだけでなく、総合や教科の教材としての活用ができる内容で大変ためになった。校内で周知するとともに、地域にも知らせていきたい。
- ・本日教えていただいたwebツールについては、本校の職員に周知する。児童にも活用の場を設けていきたい。
- ・地理院地図のサイトの活用で学校周辺の地形の様子を知ることができたので、今後の防災教育の授業や防災の研修に生かせようと思った。
- ・地理院地図の断面図作成ツールの使用方法がよく分かり、興味深かった。
- ・今昔マップは初めて知った。防災教育に限らず、社会科や総合的な学習の時間などにも活用したいと思った。
- ・次年度の計画を検討する際、地域防災webを活用できないか考えていきたい。
- ・理科の教科指導でシームレス地質図を扱ったことはあったが、様々な使い方を教えていただき、今後の指導に役立つ内容だった。
- ・防災指導でも、地理院地図を扱って、指導に生かしたい。
- ・独自に活用できるものが多くあり、うまく使えるように考えることと使い方をきちんと示していくことが必要だと思った。
- ・生徒が理解したり、防災・減災についてとらえたりすることができるよう、防災主任は考えていくことが必要だと考える。
- ・有意義な研修をありがとうございました。

IV 教育委員会の取組

1 学生が参加可能な教員研修

現職教員対象の研修に教員を目指す学生も参加可能とする取組は、学生が現職教員の学びを体験する意義を求めてのことだったが、一緒に受講した現職教員側にも、若くて学ぶ意欲のある学生と交流することで刺激を受けたり、後進を育てる意識を持ったりと、学生、現職教員双方にメリットのある取組として拡大の方向にあった。しかし、コロナ禍の影響を受け、参加可能な研修がスタートしたのが10月2学期から、実際に学生が参加したのは11月になってからであった。

■これまでの推移と次年度計画

2018年度	33講座	327名参加
	●参加の多かった講座	
	・ 仙台市教育課題研究発表会	
	・ 自主公開中学校「豊かな人間関係づくりを目指す生徒の育成」	
	・ 自主公開小学校「多様な見方考え方を生かし、学びを深める授業を目指して」	
	・ アクティブラーニング研修(講師：関西大学教授)	
	・ 算数・数学科研修(講師：文科省学力調査官)	
	・ 情報モラルSNS研修(講師：LINE(株)インストラクター)	
2019年度	46講座	356名参加
	●参加の多かった講座	
	・ 仙台市教育課題研究発表会	
	・ 自主公開小学校・中学校・中等教育学校	
	・ 特別活動研修(講師：文部科学省教科調査官)	
	・ 算数・数学科研修(講師：文科省学力調査官)	
	・ 小学校外国語活動研修(講師：文部科学省教科調査官)	
	・ 小学校図工・中学校技術科研修(講師：民間インストラクター)	
	① 双方向性ネットワークと3Dプリンタの授業での活用法	
	② プログラミング	
2020年度	17講座	110名参加
	●参加の多かった講座	
	・ 小学校生活科研修(講師：文部科学省教科調査官)	
	・ 特別活動研修(講師：市立小学校校長)	
	・ 消費者教育研修(講師：消費者教育支援センター 主席主任研究員)	
	・ 国語科研修(講師：宮城教育大学名誉教授)	
	・ 小中学校総合的な学習の時間研修(講師：國學院大學教授)	
	・ 社会科研修(講師：文部科学省教科調査官)	
2021年度(予定)	46講座	490名定員

2 OJTサポート事業

仙台市教育センター研修は、「仙台市立学校教職員人材育成基本方針」に基づいた、教職員のキャリアステージに応じた研修の体系化を図り、各学校でのOJTを支えることを基本方針にしている。既に始まっている教職員の大量退職と大量採用、加速度を増す学校現場の多忙化に、コロナ禍による密の回避や時間確保の難しさが加わり、OJTの重要度・必要度がさらに増してきている。

その具体として、①各学校の教育活動に係る諸課題について、各課(室)公所等の専門性を生かした「サポート訪問」と、②各学校でOJTを担う、キャリアステージ充実・発展期教員への悉皆研修を実施している。



■サポート訪問の実績

年度	校数	受講人数	種別順1	種別順2	種別順3	教科等ベスト3
2016	57	1122	授業力向上	校内研究	特別支援教育	外国語・英語、情報、特別支援
2017	62	1712	校内研究	授業力向上	学校事務職員	道徳、国語、事務
2018	57	1674	校内研究	授業力向上	特別支援教育	道徳、情報、事務
2019(1月末)	45	1344	授業力向上	校内研究	情報活用	道徳、情報、理科
2020(3/9)	61	775	校内研究	授業力向上	情報活用	外国語・英語、道徳、社会

■キャリアステージ充実・発展期(16年～)教員への悉皆研修

- ※中堅教諭等資質向上研修Ⅰ(10年目教諭)、中堅教諭等資質向上研修Ⅱ(13年目)
- ・ミドルリーダー研修 教職経験16年目の教諭(計2回実施)
 - ・充実期研修 21年次教諭・養護教諭
 - ・発展期研修 26年次教諭

3 発展期研修の実際

■研修のねらい

学校に寄せられる要望等に対応する演習を通して、学校運営力の向上を図る

■OJTに生きる力量

危機管理・安全管理
高い倫理観

ここが重要!

■内容

講義「学校に寄せられる要望等への対応」

講義・演習「スクールコンプライアンス」

講師：宮城教育大学 特任教授、教育相談課主幹



演習はグループ討議で行われた。立場を交代しながらロールプレイをしてみて、改めて気づくこともあった。教職経験25年ともなると、経験と個性が表れる



講師は中学校現場と教育委員会を経験したエキスパート。「同僚にも聞かせたい」「学校でも話して欲しい」の声が多数あがった



以下、研修後のアンケートからは、研修のねらいが浸透したことが伝わってくる。

研修アンケートは2つの視点で記入している。

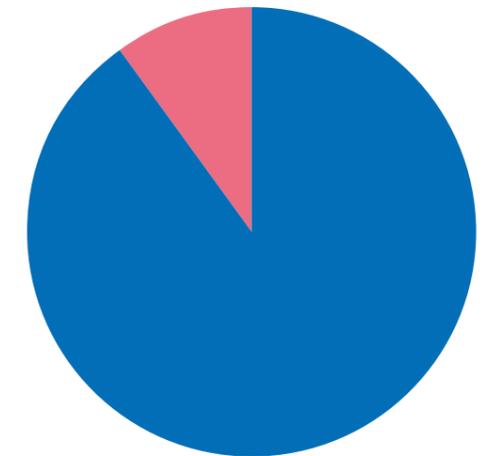
①研修内容についての感想をお聞かせください

- ・今の学校現場の厳しい現実に対応するための様々な方法を教えていただき、大変参考になった。私たちの立場に共感して話を進めていただいたことに感謝。
- ・「そうだ、そうだ」と思いながら拝聴した。学校現場への様々な要望に対応していく力が大切だと思うので、理論を踏まえつつ実践の中で目指したい。
- ・教員としてのあり方について改めて学んだ。「教育は夢を語る場」という言葉に感動した。
- ・現場の実情に合った研修で、分かり易くとても参考になった。

- ・使わない方がよい言葉、使うと良い言葉が具体的に示されたのが良かった。口癖にしたい。
- ・先輩教員に、愛情あるお話が聞けたことが良かった。
- ・日々の自分の実践を見直す良い機会になった。ロールプレイを通して気づかされたこともあった。
- ・若手教員のサポートやフォローをすることがあるのでとても参考になった。
- ・職場に同年代がいないので、同じ時代の感覚で話せたのが良かった。それぞれの経験をもとにした対応例が参考になった。
- ・とても勇気づけられた。具体的な対応を、今後活用していきたい。
- ・普段の対応の中で、自分に足りないところに気づくことができたので、今後に生かしていきたい。

●発展期研修受講後アンケート

■よかった ■だいたいよかった



②どのようにOJTへ生かしていくか、具体的にお書きください

- ・同学年の若い先生が燃え尽きないように、学年経営に生かしたい。チームワークを大切にしながら、一人で抱え込まない、抱え込ませないことを目標にしていきたい。
- ・若い先生方へのアドバイザーとして、少しでも役に立ちたい。
- ・学校の先生方に資料を配付し、学ぶ機会をつくりたい。
- ・若い先生方の電話対応に冷や冷やしている。機会を捉えて、今回の学びを伝えたい。
- ・OJTの時間はなかなかとれないが、避けられないことなので、資料を回覧する。
- ・学校に戻って、後輩の未来ある先生方の応援団になれるよう仕事をしたいと思った。困っている若い先生に、さりげなく手を差し伸べられる余裕をもって働いていきたい。
- ・20代の教員には、対応のイロハということで、資料を配付し説明する。ミドルリーダーである30代の教員には、資料を使って日々の取組を確認させたい。
- ・倫理観の個人チェックは行っているが、皆で互いに振り返ることで相互理解が図れると思う。講師の気さくで現実味のある話し方や実例を、伝講の際、参考にしたい。
- ・若い先生方を支える視点で関わるように努めたい。職員間の信頼関係を築き、伝えやすい空気を作り、トラブルの未然防止に努めたい。
- ・今回のように小グループで演習をしてみたい。シミュレーションしておくとお互いの対応が違ってくると思う。
- ・若い先生方に、今回の研修を生かした具体的な伝え方をしていきたい。学校の活動全体を見直し、学校評価検討会等に生かしていきたい。

V 学校現場のOJT

1 校内留学

学校は、異年齢で経験の異なる教員が在職し、学び合いや教え合いが可能なチーム集団である。

仙台市立七北田小学校では、数年前から、校内留学と称して、若手の先生が先輩の先生を指名し、丸1日密着して普段の子どもへの接し方や指導の様子を学ぶ、画期的なOJTを実践している。若手がベテランから学ぶ(ベテランが若手に伝える)だけでなく、年齢に拘らない学びに広がったり、同僚性やコミュニケーションの高まりが見られたりしている。さらに指名制が生み出す効果として、指名された教員のモチベーションの高まりと、指名されなかった教員への意識付けの効果も報告されている。多忙化対応としても、校内で日常的に実施でき移動の必要がないというメリットもある。

かつて、学級王国とも言われた教師間の壁を取り除く意識改革から始まったこの取組は、職人技にも例えられる教員の資質能力を高めるOJTの方法として、また、今後、学校教育を社会に開いて行く意識改革にもつながるものとして、今後の可能性が大きいと考える。校内留学を成功させる鍵は、1日留学を支える補欠体制(人的配置)である。人的体制を配慮した実践しやすい環境整備を提案する。

1月に実施した校内留学について、当事者の2人の先生から生の声を聞きました。

校内留学をしたのは●鈴木風人先生。新卒新任で、5年生担任。

指名され受け入れたのは●井上朝子先生。教職9年目、6年生担任。

Q 校内留学があると知ってどう思いましたか？

井上 最初は、できるのかと思いました。1日学級を空けて大丈夫かな、と。今は、大丈夫なんだと思えます。

鈴木 他の先生の指導の姿を見る機会がなかなか無いので、貴重な機会になりました。初任校なので、そのまま受け止めた感じです。

Q 井上先生を指名したのはなぜですか？

鈴木 七北田小の6年生は、地域、保護者の方から、学校のために動いているとか、褒められるんです。だから、指導を見たいと思いました。また、先生方からも、(井上先生の指導は)勉強になると言われました。

Q 指名された時は、どんな気持ちでしたか？

井上 自分でいいのかな、と思いました。去年までは、見せていただく側だったので。見せる立場に変わりつつあるんだということを感じました。年齢構成で言えば、赴任した時は若い方から2番目でしたが、今は年下が7~8人います。昨年、今年と、一気に立場が変わって来ていることを実感しています。

Q 井上先生から、具体的には何を学びたいと思ったのですか？

鈴木 6年の子どもたちが輝いている姿や何事にも挑戦しようとするのはなぜか、どうやってそんな子を育てているのか。自分の学級ではなかなか難しいので、やる気にさせる、積極的に取り組ませるには、どうやっているのか見たいと思いました。

Q フレッシュ先生研修と校内留学との違いはどんなところですか？

鈴木 子どもがいなくての指導法説明よりも、実際の子どもがいる中で見るのが魅力だと思います。

Q 井上先生は、何を伝えようと思いましたか？

井上 研究授業だと準備された姿になってしまう、普段はできているのか、と正直思っていました。普段、楽に、楽しくやっているところを伝えたいと思いました。

Q 普段の姿を見せたくないという気持ちではなく？

井上 研究授業では、子どもは緊張しています。普段はもっとリラックスしています。昨年まで校内留学させていただく側として、普段の姿を見たいと思っていたので、見られたくないと言うより、こんなので大丈夫なんだ、という思いです。

Q そう思えない先生もいると思いますが… 七北田小でできているのはなぜなのでしょう？

井上 普段の姿を見せるよ、と言う先生が多いんです。自分もそうなりたいと思います。これまで5人の先生に見せてい



鈴木風人先生

ただききましたが、それぞれ違っていろいろでした。今年も見せていただきたいと思っています。また、まだ低学年を担当したことがありません。受け持ったことがない学年の様子を、見せていただいたりしました。

Q 留学後、井上先生に親しみを感じたり質問しやすくなったりましたか？

鈴木 なかなかそうはいきません。6年生は忙しいだろうし、自分もやらなければならないことがたくさんあって…(と、遠慮している様子)

Q 留学後、自分の学級経営に生かしていることはありますか？

鈴木 担任と子どもたちとの関係性です。教師と子どもは同等ではないと思ってきましたが、信頼関係を築くには児童と同じ立場になることが大切と気づき、寄り添う場面をつくらうと思いました。休み時間話したり、一緒に遊んだりしています。また、自分の指導のぶれに気づかされました。

Q 他校ですが、子どもを叱れない新任



井上朝子先生

の先生がいると聞きました。

鈴木 その傾向はあります。

井上 自分は先生から厳しくされた経験があり、それを感謝しているのも、むしろ叱れます。厳しいだけではダメで、厳しさと楽しさのメリハリの大事さを、様々な先生のやり方を見て学びました。そういう先生に出会うことが凄く大切だと思います。

Q 最初、1日学級を空けて大丈夫かと思ったけれど、今は大丈夫と思えるのはどうしてですか？

井上 校内留学を進めるなら、学級を1日空けてもよいという校内の支援体制が必要だと思います。七北田小は学年にフリーの先生がいます。また、担任の側には、クラスの子もたちを、大変なクラスだったら預けられないという気持ちはあるかもしれない。どう思われるという不安があるかもしれません。

Q 指名される先生と指名されない先生がいることで感じることはありますか？

井上 確かに偏りがあることは感じます。複雑ではあります。

Q 校内留学を広げたいと思いますか？

井上 若い先生だけではなく、年齢を重ねた先生が若い先生を見るということもあっていいと思います。学年に戻ると、学年の先生方から、どうだった、と聞かれます。みんな知りたいのだと思います。

鈴木 学年の先生もそうですが、新任同士での情報交換もよくやっています。

鈴木先生は、穏やかで礼儀正しい先生でした。校内留学報告書には、学んだことと自分の学級の実践に生かしたいことがしっかり書かれていました。初任校で校内留学をしたことが貴重な経験だった、と思う時がきつくとおもいます。若い先生方のロールモデルになっている井上先生ですが、先生を成長させたのも、校内留学などで見た先輩の先生の姿なのだとお話を伺って確信しました。

菅原邦子校長先生からもお話を伺いました。

菅原校長先生は、七北田小には今年度赴任し、校内留学も初めての経験ということです。

学級づくりがすべての基盤になると思っています。先生方が、実際に1日、どんな声かけをしているのか、どんな工夫をしているのか、職人芸のようなその指導法を見ることは、とても有効なことだと思います。コロナ禍で2ヶ月遅れの学校再開となり、例年2回行っている校内留学実施期間が1回になっただけでなく、縦割り活動ができず、行事も学年実施や分散開催で、他の学年と活動を共有する機会がなかなかありませんでした。合同の授業や行事の機会に他の先生方の指導の仕方を見る、刺激を受ける機会がなかったんですね。その結果、先生方から、学年の枠を外してざっくばらんに話し合いたい、という要望が上がり、設定しているところです。校内だからこそ、凄いい先輩ではないちょっと先輩先生の普段の指導に触れる、こんな方法があったのかと思うぐらい、校内留学はよい方法だと思います。

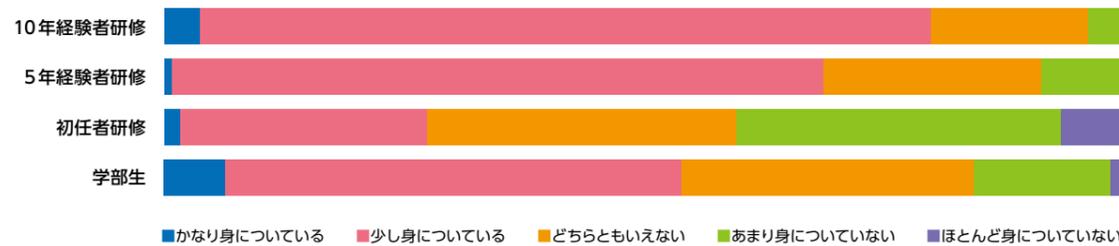
先生方も継続の意識をもっています。事後として、井上先生が鈴木先生の学級を見に行く、ということがあっていいかと思っています。本校には通級の学級もあります。通級担当の先生が、通級してくる子どもの学級を見せて欲しいという希望もありました。学級を開くという職場づくりをしていきたいですね。



菅原邦子 校長先生

VI 4年次研究の成果と課題

3年間(2017、2018、2019)のアンケート調査と聞き取り調査の分析・比較



このグラフは初年度(2017年度)アンケート調査のうち、最も基本的な「授業力」についての本人の現状認識を表している。最初の問題提起は、学部生の自己認識の高さと初任者の落ち込みという認識のギャップであった。この結果を受け、養成段階の大学は、学部生の自信を「実」のあるものにする必要があると考えた。一方学校と養成機関は、5年、10年と研修や実経験を重ねていく中で自己認識が高まっていくことを確認できたと同時に、初任者研修のあり方を検討する必要性を考慮することになった。初任者が、折れることなく力を付けていくには、何が必要か?である。

着目したのが10年経験者の実体験に裏付けされた「学部生のうちに身につけておくべき資質能力」のアンケート結果である。そこから見えたのが「教科指導」や「生徒指導・教育相談」よりも、「教員として、社会人としての基礎的素養=対人関係能力、チーム力、協調性」が「学部生のうちに身につけておくべき資質能力」であるという結果であった。学部生の回答も同様であり、学校長からの聞き取り内容とも重なるものであった。

ここから導き出されるのは、(一概に言ってしまうのだが)学部生のうちに人間としての基礎的素養を身につけて教員となり、周囲と協調しながら実経験と研修を積むことで、「教科指導」や「生徒指導・教育相談」といった教職に特化した資質能力を身につけていく、という過程であり、そのために大学、学校現場と養成機関がそれぞれ取り組むべきことは何かということである。

10年経験者の、実体験に裏付けされた「学部生のうちに身につけておくべき資質能力」の中で、もう1点特徴付けられるのが、「防災教育・安全教育に関する知識・技能」の項目である。東日本大震災の被災地の教員であるという意識の高さから、必要感をもってると考えられる。(※仙台市教員だけでなく、宮城県教員アンケートでも同様の結果が出ている。)

このアンケート結果に基づいて実践した養成段階から現職教員までの研修の取組を、成果として記述する。

養成段階及び現職教員への取組(大学)

1. 教師力育成「探求の対話(p4c)ゼミナールPすく〜」の実践

全国防災ジュニアリーダー育成オンライン研修にファシリテーターとして参加した。この実践では、以下の成果があった。

- ①参加した学生たちに、座学では得られない多くの気づきと学びがあった。
- ②防災に取り組む全国の中高生に触発され、学生自らの防災意識が高まった。
- ③オンライン研修のメリット、デメリットを体験することができた。

2. 教職大学院防災研修(仙台市教職委員会との連携事業)

教職大学院の防災教育授業を現職教員の防災主任に公開した合同研修を実施した。この実践での成果を以下のようにおさえた。

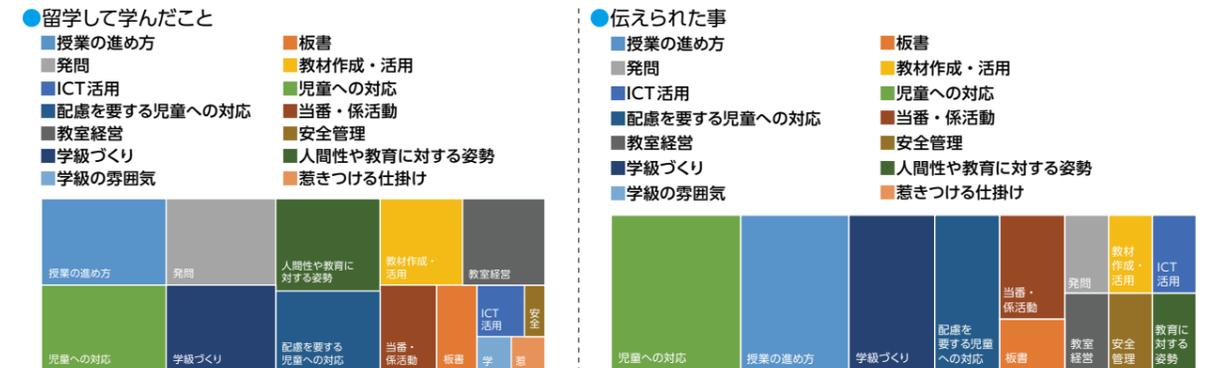
- ①大学の高度な専門的知見を学校現場に生かすねらいが達成された。
- ②本学の防災教育研究機構<311いのちをまもる教育研修機構>と教育委員会・学校現場の連携・協働の初めの一歩となった。
- ③上記<311いのちをまもる教育研修機構>が仙台市・仙台市教育委員会と締結した防災教育・啓発の推進に関する相互連携協定により、震災伝承を軸とした多様な災害に対応できる人材育成に向けた連携の深化が見込まれる。

養成機関の取組

教員の大量退職と大量採用、加速度を増す学校現場の多忙化に、コロナ禍による密の回避や時間確保の難しさが加わったことで増しているOJTの重要度・必要度への対応として、教育センターはOJTサポート事業を推進、成果をあげている。

- ①各学校の教育活動に係る諸課題について、各課(室)公所等の専門性を生かした「サポート訪問」
- ②各学校でOJTを担う、キャリアステージ充実・発展期教員への悉皆研修
- ③現職教員対象の研修に教員を目指す学生も参加可能とする取組は、一緒に受講した現職教員側にも、若くて学ぶ意欲のある学生と交流することで刺激を受けたり、後進を育てる意識を持ったりと、学生、現職教員双方にメリットのある取組となっている。

学校現場の取組 校内OJT「校内留学」の成果



2018年度、実施校24名の教員に行ったアンケートの結果であるが、具体的な学びが分かる。若手の先生が先輩の先生を指名し、丸1日密着して普段の子どもへの接し方や指導の様子を学ぶ。同僚性やコミュニケーションの高まり、指名されなかった教員への意識付けの効果も報告されている。多忙化対応としてのメリットもある。職人技にも例えられる教員の資質能力を高めるOJTの方法として、さらに、学校教育を社会に開いて行く意識改革にもつながるものとして、今後の可能性が大きい取組である。

今後の課題

令和の日本型学校教育に対応する資質能力の獲得に対応した研修の在り方

- ①指標と連動した教員研修の在り方、教員がモチベーションを上げる指標の活用
- ②教員養成大学と教育行政とが連携した管理職・リーダーへの研修の充実
- ③教員養成段階の学部・教職大学院授業への反映

令和2年度 教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業

未来の教育を支える優れた教員の育成を目指す 養成・研修の一体的改革推進事業 4年次報告書

発行月 令和3年3月
発行元 国立大学法人宮城教育大学

野澤 令照 国立大学法人宮城教育大学学長特別補佐(特任教授)
内藤 恵子 国立大学法人宮城教育大学連携推進課教育支援コーディネーター

共同研究機関/協力者(敬称略)

●宮城教育大学

村上 由則(教職大学院 教授)
小田 隆史(防災教育研究機構<311いのちをまもる教育研修機構>准教授)
庄子 修(上廣倫理教育アカデミー特任教授)

●仙台市教育委員会

新妻 英敏(教職員課主幹)
佐藤 全(教育センター所長)
佐々木賢哉(教育センター主幹)
鈴木 文子(教育センター主任指導主事)

●仙台市内小・中学校

菅原 邦子(七北田小学校長)
井上 朝子(七北田小学校 教諭)
鈴木 風人(七北田小学校 教諭)
佐藤 由美(台原小学校長)
大友 重明(館小学校長)
阪元 容昌(桜丘小学校長)